

教育者としての杉浦非水

小林 宏道

一九三四年に長年勤めていた三越を退社していた杉浦非水は、翌年の一九三五年に創設された多摩帝国美術学校の初代校長兼図案科主任教授となる。それ以前にも非水が教育に携わる機会はいくつかあった。一九二二（大正十）年から一九二二（大正十）年まで日本美術学校図案科講師に就任している。（一九二三年からの欧州遊学のために辞任）また一九二九（昭和四）年には帝国美術学校工芸図案課長に就任している。多摩帝国美術学校創設の経緯は、帝国美術学校の校長であった北玲吉が財団法人設立や専門学校への昇格を目指し、上野毛校地への移転に伴う残留派との内紛、抗争の曲折を経ての分裂派としての開学であった。北玲吉、井上欣治、牧野虎雄らとともに非水も創設の主力メンバーであり、様々な混乱や学校運営の処理に追われる北玲吉に代わって、初代校長の任を非水が担うこととなる。そうした美術教育の現場に専念出来ることも考えての三越退社だったかもしれない。とはいえ、図案家としての活動はその後盛んに続けており、翌年の一九三六年には「杉浦非水図案生活三十年記念連合展覧会」（新宿三越、白木屋、伊東屋、東京堂）を開催しており、たばこのパッケージデザインなどの仕事も手がけている。また全日本商業美術連盟を結成し、委員長に就任している。

多摩帝国美術学校の教授陣には、中村岳陵、郷倉千軒、牧野虎雄、木村荘八、中村研一、鈴木誠、吉田三郎、佐々木大樹、里美宗次、木村和一、井上欣治、三木清、逸見梅栄、大隅為三、渡辺素舟、今井謙次といった日本画、洋画、図案、学科の各分野での錚々たる人材が携わっていた。しかし、経営的には苦難の連続で、出資貸付元であった東横電気軌道株式会社（現東急）との関係により、学校側から理事に任じたのは杉浦非水一人であった。その後一九四三（昭和十八）年に昭和医専の援助を得るが、戦後の一九四七（昭和二十二）年に

なつて、ようやく杉浦非水理事長就任がかなうのである。戦後の学制改革により、私立学校は学校法人化され、多摩造形美術専門学校を経て一九五一（昭和二十六）年に多摩美術短期大学となり、初代理事長には杉浦非水が就任する。その後、学校施設の充実や再三の申請により、四年制大学設置が認可され、一九五三（昭和二十八）年に多摩美術大学となり、短期大学に続き、学長に井上欣治、理事長には杉浦非水が就任する。図案家としての多忙を極めつつ、非水がいかに美術学校の運営と教育に尽力したかが、こうした推移からも伺い知れる。

それでは実際の教育の現場や学生たちとの関わりはどうだったのだろうか。多摩帝国美術学校の図案科の当初の学生たちには、帝国美術学校から移籍組も多く、創立期からすでに高学年の学生も在籍していた。（当時は五年制）指導者には非水が欧州遊学からの帰国後、若手図案家たちと結成した、ポスター研究や先進的な図案制作を目指した「七人会」の同人であった新井泉や小池巖、野村昇などが加わっている。帝国美術学校時代の卒業生を含む「新図案家集団」や教員、学生たちとともに「多摩帝国美術学校図案科会」も結成されている。この組織は一九三六（昭和十）年の「杉浦非水図案生活三十年記念連合展覧会」の一環として、七人社、新図案家集団、構図社のそれぞれの展覧会とともに第一回展を開催し、機関紙『デセグノ』を発刊している。このエッセイでデザインを意味する小冊子は、会員のみならず他校の図案科などにも広く配布され、会員以外の執筆陣も加わり、一美術学校の自治的な機関紙にとどまらず、広くその存在を評価されていた。『デセグノ』はその後一九三九（昭和十四）年の第十号まで続いている。

当時の図案科の教育内容は、一年次に日本画（静物、花鳥など）と図案の基礎、二年次に日本画（人物）と石膏、人体デッサン、商業美術、染色などの基礎的な実習を行い、三年次以降はそれぞれの専攻にしたがって、自主的な研究活動を行っていた。ここでは各自の制作ばかりでなく、共同研究システムとして具体的な店舗などのデザイン案件を設定して、建築設計、宣伝計画、印刷物制作、内装ディスプレイからコスチュームデザインにまで至る協働シミュレーションを各専攻で分担制作し、校内で発表展示会を開催することもしていた。



1938年頃の多摩帝国美術学校の中庭と花壇写真
（撮影：井手梅次郎）

校長、図案家として多忙をきわめた杉浦非水ではあるが、主任教授として「図案の基礎に写生を置く」という方針は一貫して多摩帝国美術学校からその後の多摩美術大学まで受け継がれていく。杉浦非水は図案家になる前には日本画家を目指しての上京と東京美術学校への入学であった。松山中学時代に四条派の松浦巖暉に師事し、上京後は川端玉章に入門している。非水の徹底した観察力と写生精神は、この日本画を学ぶことから醸成されたものである。しかも円山四条派の写生を基本としながらも、その花鳥を有機的に描く裝飾性にも秀でた画風が、岡倉天心らの新日本画運動とも一線を画し、世紀末の裝飾美術に無意識的に近づいていたといえる。

非水が図案家としての道を歩むきっかけは、黒田清輝との出会いであり、黒田がフランスより持ち帰った多くのアール・ヌーボーなどの図案資料が非水を魅了し、日本画と洋画の中間に位置する図案の世界へと導かれていくこととなる。一九二二(大正十二年)、すでに図案家としての名声を得ていたにも関わらず、念願の欧州遊学の旅に出る。主にフランスにてアール・ヌーボー、アール・デコの見聞と三〇〇点におよぶポスターをはじめ、多くの図案資料を蒐集しつつ、欧州でのデザイン運動の動向やデザイナーたちの協働作業などに大いに刺激をうけている。

帰国後、若手図案家たちとの「七人会」の結成時にも『アフィッシュ』という研究機関誌を発刊しているが、「非水漫録(四)」「アフィッシュ」一九三〇年第六号掲載」という文中で「植物本来の生育状態や其習性の観察が本当でなかったら、自然の命は縛まへられたものではない。一局部の写実の綜合は自然への冒瀆であるからである(中略)。或る日本画の大家の作品に芒に桔梗を配した屏風があった。其屏風に描かれた桔梗は頗るよく發育してゐたが、日光の問題が忘れられて居た。大自然を彩る野の花には此日光の問題が一番大切である。(中略)私は私の百花譜に發表して居る花の写生を始めてから、幾多の失敗の経験を経て来たが、最初に花屋の切花を写生して見たが、どうも不満足な点が多かった。」とあり、また「嘗て一冊のスケッチブックも汚したくない基礎の薄弱な手合いが、商業美術を看板にして都市の美観を汚瀆し、街上に塵の山を作る紙屑の裝飾家として活躍する。そんな仲間は何んの情操ぞやである。」(『アフィッシュ』一九三〇年第一号「非水漫録(二)」)と痛烈に批判しているように、欧州の最新の動向や図案の可能性を志向しながらも、模倣や垂流の安易な図案を危惧し、着実な観察と描写を礎とした手作業としての創作を厭わぬことを力説している。

非水は植物の写生を奨励するために多摩帝国美術学校の中庭に多くの花壇や植栽

を設け、日ごろからそれらの写生やデッサンに励める環境を用意した。夏休みの課題では一〇〇枚の植物写生を課して学生たちを閉口させていたが、図案家は画家以上に独特で繊細な観察力とデッサン力を養わなければならないという理念を体現していた。その課題は多摩美術大学となった晩年の授業まで続いていったという。

多摩美術大学には杉浦非水のスケッチブックが五冊と、シート状スケッチの束が遺されている。描かれた時期は一九三九(昭和十四)年から一九四四(昭和十九)年にかけてのものだが、いくつかに「多摩造形美術専門学校」のスタンプが押されていることから、恐らく戦後、非水本人から大学へ教材として活かしてもらおうよう寄贈されたものであろう。鉛筆や水彩で描かれているスケッチ群は、身近な植物や風景、虫や鳥獣(剥製なども含まれる)が多岐にわたって描かれている。面白いのは、形状を巧みにデッサンするばかりではなく、矮鶏や隼など描かれた物の各部の色彩を細かくメモして、図案の色指定の様相を呈しているものもある。草木花や果実なども、かつて出版した『百花譜』を彷彿させる見事な観察眼と自然への敬意をうかがい知ることができる。

非水が『デセグノ』に「図案家生活三十年の回顧」の中で「餘の半面に於て、私の意志の後継者の多くを後世に貽さなければならぬ欲望を持つものである。それは私の技法の伝達でも思想の継続でもない。私の意力の継承を意味し、私の一生に成し遂げなかった図案芸術への発展向上を意味することであつて幸いにも私の周囲には純なる若者が控えている。」と書き遺したことは、現在も多摩美術大学の自由闊達な気風の基盤へと受け継がれていく。一九六五(昭和四十)年に八十九歳での逝去の際には、多摩美術大学において大学葬が行われた。

(多摩美術大学美術館学芸員)

参考文献

- ・「多摩美術大学50年史」多摩美術大学、一九八六年。
- ・「多摩美術大学創立60周年記念展図録 広告デザインの誕生から現代まで」多摩美術大学、一九九五年。



矮鶏スケッチ 昭和15年